

バンコック・ヴェトナム系仏教寺院における ヴェトナム系ならびにタイ系梵鐘について

西 村 昌 也

The Vietnamese and Thai style bronze bells at the Annamnikai
Buddhism temples in Bangkok.

NISHIMURA Masanari

I deliver a report on the manufacturing technique, style, and inscription related to the temple bell (with the inscription of 60th year of Canh Hung Era) in the Vietnamese Buddhist temple in Bangkok, Thailand, Hoi Khanh Temple (Thai name: Wat Mongkolsmakorn) and the temple bell (with the inscription of the Chinese Era, 1856) in Quang Phuc Temple (Thai name: Wat Anamnikayaram). It was revealed that both temple bells had been made from a lost-wax technique that was frequently used in bronze ware casting in Thailand, and the temple bell in Kaikai-ji Temple shows the Vietnamese tradition of temple bells while being affected by the Thai tradition of temple bells. In addition, based on the problem of the unreal name of an era, the 60th year of Canh Hung (1799), and the information acquired from temple bell manufacturing and inscription, the history of the Vietnamese immigrants, including craftsmen in the handicraft industry and the issue of their formation history in the capital during the 18th century to the early 19th century, are discussed in this report.

キーワード：梵鐘、ヴェトナム系仏教、失蠟法、ヴェトナム移民、バンコック、
景興（年号）

はじめに

筆者はタイ・バンコック（クルンテープ）において、ヴェトナム系仏教寺院を中心に、18世紀以降ヴェトナム系移民が残した物質文化について簡単な調査を行っている。その過程で、会慶寺（タイ名：Wat Mongkolsmakorn）と広福寺（タイ名 Wat Anamnikayaram）において、ヴェトナム移民と中国移民が鑄造した梵鐘2例に巡り会ったので、ここに簡単に報告する。

ヴェトナムにおける梵鐘の技術・生産上の交流については、中部ヴェトナム・ホイアン沖のチャム（Cù Lao Chàm）島のハイ・タン（Hải Tân）寺の梵鐘が、福建省泉州で鑄造されたもので、形式的には日本鐘の系譜をひき、琉球の大聖禪寺鐘と最も型式的に近いことが指摘され、琉球の梵鐘が福建にもたら

された後、踏み返しによる生産で日本鐘的梵鐘が福建に根付いたという興味深い仮説¹⁾が提出されている。

梵鐘自身をめぐる移動や交流に関しては、陳朝末期に梵鐘が海中で引き上げられ、タイビン省の寺に安置され、その後中国の広西・廉州で再発見され報告された例がある²⁾。阮朝明命帝時代の鑄造鐘で、1977年に日本の骨董店で発見され、ヴェトナム戦争時の国際平和運動に結びつき1978年にヴェトナムに返還されたバックニン省の五戸寺鐘³⁾などもあり、移民や文物移動に関する当時の文化交渉を探る一つのテーマになる。

また、タイ・バンコックへの前近代ヴェトナム系移民の歴史に関しては、Peter A. Poole⁴⁾による総合的研究や桜井由躬雄によるバンコック・サパンカオ (Sapan Kao) の景福寺 (タイ名: Wat Sommananam Boriharn) 所蔵の漢籍字喃經典の所蔵調査⁵⁾などがある。これらによればヴェトナム仏教はタイにおいて西山党の動乱を契機とした広南阮氏らのタイへの亡命時に伝わり、現在タイにはヴェトナム系仏教寺院が公式には13寺あり、うち7寺がバンコックに集中する。広福寺は、1787年創建で、タイにおける最初のヴェトナム仏教寺院とされ、広福寺、会慶寺ともにラタナコシン朝から勅賜された伝承を残している。また、ヴェトナム系仏教 (Annamnikai) はラーマ (Rama) III世期 (1824-1851年) にタイの国家仏教に公認され、現在に至っている。ただし、近年では中国系タイ人が主たる担い手で、現在10万人程度の信者がいると推定されている⁶⁾。

一 会慶寺鐘

会慶寺は、王宮地区より西に位置するチャイナタウン (Yawaraj) のSamphanthawong地区にあり、Charoen Krung通りとYawowarat通りを結ぶ小路Plaengn Namkhet通りに位置する。西山党起義時に戦乱をさけて移住したヴェトナム移民が建立したものとされる⁷⁾。

鐘 (Fig.1,2) は本堂内に鼓とともに下り下げられている。

総高は82.8cm、口径は47.2cm、龍頭は26.8cmである。

中空の鐘身部は、突起帯 (紐) が縦に4本、横に1本走り、縦横の突起帯の交差点 (4カ所) には円形の撞座が配されている。また、それぞれの撞座の上には、上位からみて時計回りの方向で、春、夏、秋、

1) 杉山洋「ホイアン歴史博物館の梵鐘」(『シルクロード学研究—海のシルクロードからみたベトナム中部・南部の考古学的研究—』vol.15, 2003年)、123-127頁。

2) 潘文閣、毛漢光、鄭阿財編『越南漢喃銘文匯編二集』(下)(中正大学文学院、漢喃研究院遠東学院、2002年)。Phan Đại Doãn and Đinh Khắc Thuân (Thêm một bài văn của Hồ Tông Thốc “Chiêu Quang tự chung minh” *Tập chí Hán Nôm* 1998 (3), 1998年)、86-90頁。

3) 後藤均平『日本のなかのベトナム』(そして、1979年) 林正子「越南五戸寺の明命九年銘鐘をめぐって (I)」『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学』(11号, 2004年)、96-107頁。

4) Peter A. Poole *The Vietnamese in Thailand*. (Cornell university Press, 1970年)。

5) 桜井由躬雄「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」(『東南アジア—歴史と文化—』No.8, 1979年)、73-117頁。

6) 岡田雅志氏の普福寺での聞き取りによる。

7) 段立生『泰国中式寺廟』(大同社出版, Bangkok, 1996年)。

冬の4文字が鋳出されている。4面の池の間（交差する横走突起帯より上位の大きい無紋面）のそれぞれの四隅には文様が付され、向かい合う2面（“春”と“夏”に挟まれた池の間と“秋”と“冬”に挟まれた池の間）に銘文が鋳出されている。鐘身の頂部には2cmほどの穴が作出されているが、これも鋳造時のものである。龍頭（Fig.5）は、外を向いた龍が身をくねらせながら、縦走突起帯より上の肩部近くで鐘身と接合している。尾部の交点上にはつり下げのための円環（直径7.5cm）が付されている。また、龍身（Fig.6）には足が付されていない。龍頭と鐘身の無紋突起帯は金箔が貼り付けられていた跡が明らかである。

銘文（Fig.3,4）は池の間2面上に、凸字として鐘本体と同時鋳出されている。

“春”と“夏”に挟まれた池の間には、以下の銘文（Fig.3）がある。

大越国清華父安處流寓暹羅国
萬慕處 恭就
会慶庵
合本道舍男信女衆等喜造洪鐘
信供

庵は巷とも読めなくもないが、文脈上、庵と読んだ方が適当であろう。

そして、“秋”と“冬”に挟まれた池の間（Fig.4）に寄進年と製作工人の名が記されている。

景興60年孟夏吉日
才工黃玉堂

景興60年は1799年に相当するが、この問題については後述する。

製作技術痕跡としては、合范線やその削り消し時の跡などが観察できない。また、龍頭の龍は非常に複雑な形をしており、蠟型による模の製作を考えなくてはならない。銘文の字体が凸状であることは、これは、蠟で模字を製作後、本体の蠟型に貼り付けたことを示している。さらに鐘身の内面には、等間隔で細い浮線状痕跡が縦走している。これは、後述するが土製の分割鋳型で鋳造した時に生じるものではなく、縦長の蠟版を中子状内范（内側の鋳型）に貼り付けて蠟型で鐘身を作った結果生じるものである。従って、当例は失蠟法による鋳造と判断される。

二 広福寺鐘

広福寺（タイ名：Wat Anamnikayaram）は、現王宮地区からチャオプラヤ河左岸沿いに7-8km北方のバンポー（Ban Pho）域の川岸に位置している。ラタナコシン（現タイ王朝）朝初代のラーマI世代に、ここに居住することを許されたヴェトナム人が勅令のもと建てたとされる。

鐘（Fig.7）は本堂裏に鼓と共につるされている。総高は105cm、口径は50.2cm、龍頭は39.1cm、

口唇厚は4.3cmである。

中空の鐘身部は、突起帯（紐）が縦に4本、横に1本走り、縦横の突起帯の交差点（4カ所）には円形の撞座が配されている。タイ仏教寺院での典型的な使用法である、金箔の貼り付けが突起帯と龍頭に残っている。4面の池の間のうち、1面に銘文が鋳出されている。鐘身の頂部には直径7.3cmほどの穴（Fig.9）が作出されているが、これは鋳造時のものである。

龍頭（Fig. 10）は、外を向いたナーガ4体が身をくねらせながら、縦走突起帯より上の肩部近くで鐘身と接合している（Fig.11）。龍頭頂部は円環ではなく、5段重ねの鏡餅状形状である。

銘文（Fig.8）は寄進年と寄進者のみを記すものである。

咸豊丙辰年季春月吉日立

信女

許氏鳳敬奉

汝

咸豊丙辰は1856年である。寄進者の許氏鳳と許氏汝は姉妹か母娘なのであろう。年号から中国系移民による寄進と判断される。

当例も合范線やその削り消し時の跡などが観察できない。また銘文の“日”“がやや右肩上がり”にずれている。これは、蠟で字体を製作後、本体の蠟型に貼り付けたことを示している。さらに鐘身の内面には、会慶寺鐘でも述べた細い浮線状痕跡が縦走している。会慶寺鐘同様、当例も失蠟法による鋳造と判断される。

三 認 識

両例の研究を通じて認識できたことを書き留めておきたい。

A. 梵鐘の鋳造技術や意匠をめぐる文化変容と背景

両鐘例とも失蠟法による鋳造であることが興味深い。失蠟法による青銅器鋳造は、タイでは先史時代（鉄器時代）には存在し、銅鼓や精巧な装飾品などの鋳造に用いられている⁸⁾。また、歴史時代以降から現在にかけて、鐘やヘーガーⅢ式銅鼓などの大型精巧品のみならず、小型製品にも用いられている。失蠟法は精巧な入り組んだ造形を製作するのに適しており、欲する形を蠟型で製作し、それを鋳型となる土で被い焼成した後に、湯口から銅を流し込み鋳造する。鋳型を分割する必要がないので、合范線が生じない。ただし、鋳型の内型に蠟を貼り付けるときにその接合痕が、土製鋳型内面に転写され、さらに

8) 西村昌也「中部ヴェトナム・ビンディン省出土の銅鼓資料と文化的脈絡の検討」『東アジア文化交渉研究』（創刊号、2008年）、187-219頁。

製品に転写される。鑄型の外型にも接合痕は転写される可能性はあるが、普通蠟模の装飾面は丁寧に製作痕などを削り消すため、残らない場合が多い。Fig.13の縦走並行線条痕は、内型に蠟板を貼り付けて鐘身を作った際の接合痕が転写されたものである。

一方、ヴェトナムでは通常、鐘のような大型品は上下に2分割された外型と内芯の鑄型の3つの組み合わせで鑄造する方法が歴史時代に行われている。現在の北部ヴェトナムでは左右に外型の鑄型を対照的に分割する鑄造法が一般的であるが、これはむしろ踏み返しを前提とした新しい技法と思われる。封建王朝代の梵鐘には鐘身の中央に凸状横線（Fig.14）が残されており、筒型の外型鑄型を重ねて鑄造していたことが理解できる。フエではこの技法で現在も生産が行われている。龍頭に関しては、筆者がこれまで観察してきた数例（Fig.14-18）に関しては、複雑かつ立体的な龍形であり、これを分割鑄型で鑄出することは無理であり、失蠟法の適用を考えなくてはならない。おそらく、失蠟法による鑄型を焼成後、鐘身本体の鑄型に合体させて鑄造を行ったものと考ええる。

ところで、会慶寺鐘と広福寺鐘の文化的脈略とそこに基づく物質文化の表徴の度合いは、若干異なっている。会慶寺例は、ヴェトナム人集団の要請で、ヴェトナム人の工人が主体となって鑄造したものと考えられる。比較資料として、Fig.12のタイ鐘とFig.14-18のヴェトナム鐘を挙出してみた。Fig.12はバンコック・ヴェトナム系仏教寺院翠岸寺（Wat Lokanukroak）のものである。Fig.14はタインホア省タインホア市のコックフオン（Cốc Hương）寺、Fig.15,16はハノイ市南郊キムラン（Kim Lan）社霊応寺、Fig.17,18はフエ市郊外Hương Chủ社ラーチュー（La Chủ）寺の梵鐘である。霊応寺鐘とLa Chủ寺鐘はそれぞれ鑄造年が1797年、1791年とされ、会慶寺鐘の鑄造年代とさほど隔たりがない。

これらとの比較を通じて、会慶寺鐘は形態やモチーフ共にヴェトナム鐘の伝統を色濃く留めていることが理解できる。ただし、龍頭と鐘身の突起帯に関して、以下のことが、ヴェトナム鐘との具体的違いとして挙げることができる。

龍頭の龍が足を持っていない：ヴェトナム鐘（参考）と比べて龍の頭部、鱗、鰭の表現において極めて類似している。しかし、足が付されていない決定的違いがある。

十字状に4体組み合わせている：ヴェトナム鐘の場合、龍2体を縦走突起帯の上に配して、龍頭を形作るが、当例は4体用いている。

頂部の円環：ヴェトナム鐘は、龍2体のそれぞれの後尾部がなくなるように胴体を接合させて、龍頭の頂部を形成している。しかし、当例の場合は接合する後尾部の上にさらに円環を付している。これらの違いは、タイ鐘と比較すると理解しやすい。タイ鐘は龍頭が通常、ナーガ（蛇）であり、足がない⁹⁾。参考に挙げたタイ鐘（Fig.12）は、ヴェトナム系仏教寺院翠岸寺（Wat Lokanukroak）の例であるが、4体のナーガを直行するように配し、その上部に円環を付している。

従って、龍頭に関してはタイ的意匠を反映していることが理解できる。また、鐘身の突起帯も、ヴェトナム鐘にみられる複数本の突線が走るものではなく、無紋の突起帯となっている。これは、おそらく金箔などを無紋突起帯に貼り付けるタイ的梵鐘利用法を前提としているためであろう。

9) ナーガ（サンスクリット語）は仏法の守護神であるが、漢訳仏教經典では龍王と訳され、龍形を取るようになったと考えられ、起源的には同一のものである。荒川紘『龍の起源』（紀伊國屋書店、1996年）参照。

銘文ではヴェトナム人工人が鑄造したことになる。鐘全体を失蠟法で鑄造することは、ヴェトナムでの失蠟法の経験から困難であったとは考えられない。

一方、広福寺鐘は、形態的にはタイ鐘の特徴を有しており、中国鐘の形態的特徴を読み取ることはできない。鑄造工人像について読み取れることは少ないが、銘文が失蠟法で同時鑄造されていることから、漢字を知る人間が工人集団に含まれていた可能性がある。さすれば、中国系住民が工人集団の中に存在し、タイ鐘の意匠に基づき生産を行っていた可能性も想像せねばなるまい。

また、比較を行って気づいたことであるが、タイ鐘、ヴェトナム鐘の違いはナーガなどの龍頭や鐘身のプロポーションの違いにみられるものの、鐘身の基本形態、交差する縦横突帯による区画分け、円形の撞座や龍あるいはナーガを装飾とする龍頭など共通点は多く、少なくとも18世紀-19世紀のタイとヴェトナムの梵鐘間には比較を拒否するような大きな懸隔は認められない。インド仏教美術史を専門とする豊山亜希氏（関西大学文学部）によれば、インドの伝統的仏教寺院などには梵鐘は存在しない。従って、中国鐘が、中国周辺地域の仏教文化に採用され、徐々に変異したと考えるのが妥当であろう。従って、本論で論じたタイの梵鐘が、ベトナム鐘と究極的には起源を同じにするという仮説を提出しておく。問題は、タイにおいて、これらがいつから利用されるようになったか、その受容がタイ仏教（あるいは上座部仏教）に与えた影響はどのようなものかなどである。

また、タイ・ビルマなどには、今回取り上げたような中国鐘に類似したもの以外に、交差する縦横突帯や撞座を持たず、ナーガを装飾しない龍頭をもつ別系統と考えられる鐘もある¹⁰⁾。これらの鐘と本紹介例がどのように時間的に、製作技術的系譜的に位置づけられるかも検討する必要がある。

大陸部東南アジアでは、15世紀末以降の地元王権側の需要・要請にもとづく中国人の移住などを介した技術の革新と伝播が研究されるようになっている¹¹⁾。18世紀以前のタイの梵鐘形式がどのようなものであるかを理解する必要がある。今後、ビルマ、ラオス、カンボジアなども視野に入れて比較研究する必要がある。

B. タイにおけるヴェトナム移民史の問題

会慶寺鐘の景興60年（1799年）について、少し考察しておきたい。

景興年号は47年（1786年）までしか存在せず、3年間の年号の後、西山朝の光中年号となる。従って、鐘を奉納したヴェトナム人集団は、1787年以前にタインホア（清華）・ゲアン（父安）をあとにしてタイに流寓し、少なくとも1799年までは、景興年号を使っていたことになる。問題は、彼らが当時のヴェトナム情勢を知っていたかどうかである。1799年は、西山朝末期に相当する。ここで、後黎朝末期から阮朝初期の国際関係を含むヴェトナムの政治情勢を説明しておく¹²⁾。

10) 坂詰秀一・上野慶司「立正大学学園寄贈の「撫石庵コレクション」について」日本古鐘研究会編『梵鐘遍歴—霊場の古鐘をたずねて』（2002年、ビジネス教育出版）、202-220頁。

11) クリスチャン・ダニエルズ「タイ系民族の王国形成と物質文化—13～16世紀を中心にして」（新谷忠彦編『黄金の四角地帯—シャン文化圏の歴史・言語・民族』慶友社、1998年）、152-217頁。

12) 当時の歴史情勢や国際環境については、桜井由躬雄編『岩波講座 東南アジア史4：東南アジア近世国家群の展開』（岩波書店、2001年）所収の各論文、北川香子「ハーティエン」、嶋尾稔「タイソン朝の成立」、増田えりか「トンブ

のちに嘉隆帝として即位する広南阮氏末裔である阮福暎らはサイゴンに依拠していたが、1782年に西山党に破れ、タイ湾に逃れバンコックのラーマI世の庇護をうけ、1788年にはサイゴンを奪取する。一方、西山党の阮恵は1788年にハノイを勢力下に納め、11月に光中帝として即位し、年号を光中に改めるが、1792年から1799年にかけては、西山朝と阮福暎側が南部で攻防を繰り返している。従って、当時の国際政治情勢や交易・交通環境を考えるなら、バンコックに居住していたヴェトナム人集団は、当然、ヴェトナム本国での情勢を把握していたと考えられる。従って、かれらは西山朝の成立などを知りつつ後黎朝年号を意図的に使っていたと可能性が非常に高い。

同じく西山朝に抵抗し、タイに亡命もしたメコンデルタ西部の支配者鄭氏の家譜では、景興52年（1791年）という年号表記¹³⁾が現れる。訳注者は景興45年の間違いとしているが、西山年号に対抗して景興年号を47年以降も使う習慣があったゆえに、記述上の誤りにつながったとは考えられないだろうか？

次は、銘文中の萬慕處についてである。当地名は明らかに当時ヴェトナム人集団が住んでいたバンコック内の地名と考えられる。萬慕は現代ヴェトナム語音では、Vạn Mộとなり、これはタークシン王がヴェトナム人を居住させたとされるバン・モー（Ban Mo）地区を指すと思われる¹⁴⁾。会慶寺から西約1 kmのところに通称“チャイナタウン”の西端にBan Mo地区があり、現在も通りの名前として残っている。Ban Mo自体は、土器や陶器を作る村という意味で、ここに土器・陶器製造者が集まっていた区域であり、周囲にはBan Doi Takなどの手工業集落があり、位置的に王室が関与した手工業地区である可能性が高い。しかし、19世紀に中国人が来住して商売を始めた頃には、土器作り集落はなかったという¹⁵⁾。

会慶寺鐘の銘文では、青銅器の鑄造工人（才工黃玉堂）がBan Moに居住するヴェトナム人集団のなかにいたことになる。阮朝期の地誌（『大南一統志』など）が示すように、清華、父安を含む当時の北部ヴェトナムにおいて、青銅器鑄造業や陶器生産業といった手工業は、どの集落にも工人が普遍的に存在するものではなく、それぞれの省レベルにおいて非常に限定的な存在である。従って、Ban Moのヴェトナム人社会に流寓した清華、父安出身のヴェトナム人は、相当数の人口があり、様々な職種や階層の人たちを含んでいた可能性がある。

また銘文より、1799年あるいはそれ以前に会慶寺が建立されていることとなり、それが勅賜に基づくのであれば、ラタナコシン朝（ラーマI世）による土地の寄進を受けたことになる。会慶寺自体は現在の華僑街の中心部にあり、寺の約2-300m南にはTrok Saphan Yuan（中国語では安南巷）という安南人街の名称も残っている。ラーマI世代に現王宮あたりに位置していた中国人集落は王宮建設のため、現在の華人街の方へ移住させられており、連動してBan Moのヴェトナム人集落が文化的にも近縁な華人の居住区に移住して、安南人街を形成し、寺院建設を行った可能性はあろう。

こうした資料は、トンブリー朝からラタナコシン朝初期の王都バンコック形成史を具体的に明らかに

リー朝の成立」を参照。

13) 『河仙鎮叶鎮鄭氏家譜』（Nguyễn Văn Nguyên訳注, Nhà xuất bản Thế Giới, 2006年）。

14) 友杉孝「港市バンコクの誕生と変容」齊藤照子編『岩波講座 東南アジア史5：東南アジア世界の再編』2001年）：265-293頁。

15) 友杉孝『図説 バンコック歴史散歩』（河出書房新社, 1994年）。

する資料の一つでもある。

[後記]

広福寺やその周辺にはヴェトナム系ならびに中国系住民が残した物質文化が散在し、その調査を現在、岡田雅志氏（大阪大学大学院東洋史研究室）と行っている。詳細はいつれ報告する予定である。

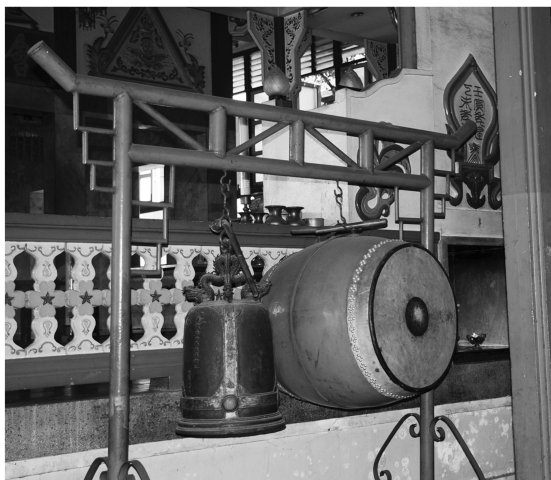


Fig.1 会慶寺鐘（バンコック）
Bronze bell at Wat Mongkolsmakorn, Bangkok



Fig.2
会慶寺鐘
Wat Mongkolsmakorn Bell



Fig.3
会慶寺鐘の銘文 1
Casted inscription (1) of
Wat Mongkolsmakorn Bell

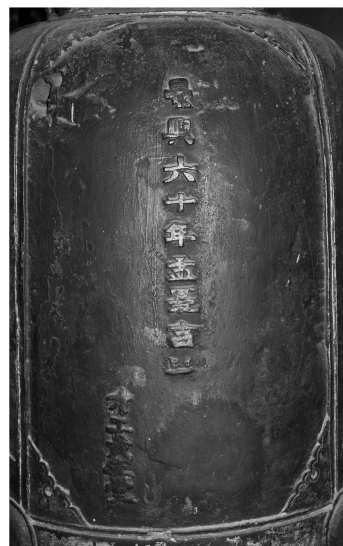


Fig.4
会慶寺鐘の銘文2
Casted inscription (2)
with a date of
Cảnh Hưng 60th,
Wat Mongkolsmakorn
Bell



Fig.5 会慶寺鐘の龍頭
Cannon of Wat Mongkolsmakorn Bell



Fig.6 会慶寺鐘の龍頭（拡大）
Cannon of Wat Mongkolsmakorn Bell (enlarged)



Fig.7
 広福寺の咸豊丙辰年
 鑄造タイ式鐘
 Bronze bell casted
 in 1856
 at Wat Anamnikayaram,
 Bangkok



Fig.8
 広福寺鐘の銘文
 Casted inscription
 of
 Wat Anamnikayaram
 Bell



Fig.9 広福寺鐘の上位部 Upper part of Wat Anamnikayaram Bell



Fig.10
 広福寺鐘の
 龍頭
 Cannon of
 Wat Anamnikayaram
 Bell

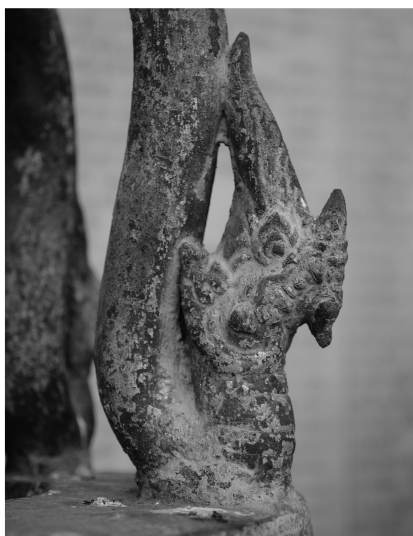


Fig.11
 広福寺鐘
 龍頭部のナーガ
 Naga of Wat
 Anamnikayaram
 Bell



Fig.12
 翠岸寺のタイ式鐘
 Bronze bell at
 Wat Lokanukroak,
 Bangkok



Fig.13 広福寺の現代タイ式鐘の内面
Interior face of modern bronze bell at Wat Lokanukroak, Bangkok



Fig.14
Cốc Hương寺鐘
タインホア市
鐘身上位に合范線あり
啓定2年（1917）鑄造
Bronze bell at Cốc Hương
Temple, Thanh Hóa
Casted in 1917



Fig.15
靈応寺鐘
1797年鑄造とされる
ハノイ市キムラン社
Bronze bell
at Linh Ứng Temple
Kim Lan, Hà Nội,
probably casted in 1797



Fig.16
靈応寺鐘
の竜頭
Cannon of
Linh Ứng Bell



Fig.17
フエ郊外La Chử寺の
辛亥（1791）年鑄造鐘
Bronze bell at La Chử
Temple in the suburb of Huế,
casted in 1791



Fig.18 La Chử寺鐘の竜頭 Cannon of La Chử Bell

